

2012年（平成24年）3月1日（木） 地方行政

木曜連載 地域力と地域創造⑱

ドイツのグリーンツーリズム

田園という癒やしの場の創出

金丸弘美

食総合プロデューサー

グリーンツーリズムとは

農村に行くと、役所の職員に「うちはグリーンツーリズムを推進しています」と言われることが多くなった。

日本でグリーンツーリズム振興が行われるようになったのは2005年から。農林水産省のホームページ（HP）には、グリーンツーリズムについて「農山漁村地域において自然、文化、人々の交流を楽しむ滞在型の余暇活動です。欧州では、農村に滞在しバカンスを過ごすという余暇の過ごし方が普及しています。英国ではルーラル・ツーリズム、グリーン・ツーリズム、フランスではツーリズム・ベール（緑の旅）と呼ばれています」とある。

また、農村グリーンツーリズムの事例として、日帰り型では農産物の直売所での購入、ブドウ狩り、イモ掘りなどの観光農園の利用、農業公園の入場、蕎麦ば麦打ちやわら細工などの農産加工体験など、宿泊・滞在型では農家民宿、農家民泊、子ども

もの体験学習などが挙げられている。

グリーンツーリズムの発祥の地である欧州では、農村の景観と宿泊の快適さとが整えてある。そこを拠点として、農村地帯での余暇をゆっくりと楽しむことが定着している。何より徹底しているのは美しい景観づくりだろう。木々や森、農村の街並みなどの調和が図られている。多くの人が観光や余暇で農村を訪れるということが、至極納得できるのである。

景観への配慮がない日本

一方、日本の実情はかなり違う。景観への配慮がない所が多過ぎる。周辺環境と調和したまちづくりが徹底されていないため、コンビニやチェーン店、自動販売機などが目立ち、くつろげる農村空間とは言い難い。

実際に地方に行き、グリーンツーリズムの内容を尋ねると、農家民泊のことだったり、子どもたちの農業体験のことだったり、都市との交流のことだったり、それぞれがバラバラで全体のつながりが見えないものも少なくない。農業体験もボランティア的に捉えられているケースが多い。

どんなトータルマネジメントで行うのか、市町村のポジショニングが明確になっていない。そして、それを地域経済の活性化にどのようにつないでいくのかといった戦略もない所が多い。

農水省HPに挙がっている農家民泊や農業体験などのメニューのどれかは、必ずと言ってよいほど各地域で実施されている。しっかりした受け入

れ体制を地域がつくり、農村の滞在を楽しめる所もあるが、ほとんどはそうっていない。

例えば、観光農園に行つてブドウ狩りをして、そこに美味しい料理や、満足できる自然環境がないため、ゆっくり滞在して楽しむことができない。農家民泊といっても、農家の住まいと一緒になつていて、食事やトイレ、風呂も一緒では落ち着けない。長期滞在と余暇を楽しむには不向きな造りのままだ。

農業体験をしても、明確なプログラムがないので、学習したという満足感が得られないといった学生たちにはしばしば出会う。

筆者は、大学生の体験授業を毎年実施しているが、受け入れてもらう農家とは事前に何度も打ち合わせを行い、しっかりした体験プログラムをつくってもらうようにしている。

安心院町の取り組み

日本のグリーンツーリズムの先進地といわれる大分県宇佐市安心院町に行った。安心院町は、同県の由布院温泉から車で30分ほどの盆地にある。かつては養蚕が盛んだった所だ。

この町でグリーンツーリズムの取り組みが始まったのは1996年。県や町の担当者や農家が地域振興について話し合ったときに、グリーンツーリズムで農業を活性化させたドイツの取り組みが話題になったのがきっかけである。

地域の有志でドイツに研修に行き、宿泊客受け入れのための学習会なども行った。02年に、簡易

宿泊の許可を得て農家での受け入れが可能になった。現在は農家65戸が、修学旅行、教育旅行だけでも年間8853名を受け入れている(平成23年度)。

その推進母体になっているのが、NPO法人

「安心院町グリーンツーリズム研究会」で、代表はブドウ農家の宮田静一さんである。地域の仲間と呼び掛けてドイツに研修に行ったとき、農村の景観の美しさに圧倒されたという。

「美しい街並みに人がやって来る。地域にお金が落ちる。ドイツに過疎はないのかと尋ねたら、過疎という言葉そのものがないと聞いて驚いた。日本でも絶対にやるべきだと思った。でないと、山間地の農業は疲弊してしまう」

こう思った宮田さんだが、当時の町会議員には「ドイツのマネをするのか」と一蹴された。悔しくて、「マネをしようにもマネができないほどドイツは進んでいます」と言い返したという。

ドイツ・グロッタタータルに飛ぶ

筆者は、宮田さんの言葉がずっと気になっていて、実際にドイツを訪ねてグリーンツーリズムを視察したいと思っていた。そして、現地に飛んだ。宮田さんが言っていたことは本当だった。

筆者が訪ねたのはグロッタタータル。フライブルクから車で20分ほどの中山間地にある村で、人口は約3000人。周辺は山々に囲まれていて、緑が豊か。宿泊は農家を改装した木造の施設で、レストラン付きの3階建て。一部屋ごとにレイアウトや調度品が違う。

筆者の部屋はセミダブルのベッドが二つあり、シャワー、トイレ、キッチン付き。部屋の奥にはガラス張りのドアがあり、芝生の庭に出られるようになっていた。

一緒にドイツに来た仲間の部屋を見て回ると、それだけで楽しくなるほど雰囲気が異なっている。本棚があつて書齋風、かわいらしいメルヘンチック、シンプルで機能的など、それぞれの部屋に個性があつた。

1階はレストラン。食事に出されるワイン、ハム、チーズ、パンなどが、どれも実に美味しい。地域で作られているものだ。

宿泊した施設と周辺の景色



施設の裏は小さな牧草地帯になっており、馬が

優雅に走っていた。その向こうに山がある。周辺の牧草地には牛もいる。その先に川が流れ、山の急斜面にブドウ畑がある。山の裾野には、農家の宿泊施設や農家レストランが並ぶ。建物の窓には必ず植木鉢があり、花が飾られている。

近くの民家を改装したレストラン



ワイン農協を訪問

宿泊施設の近くの川沿いにあるワイン農協の「グロッタタータル・ワイン醸造協同組合」を訪

ねた。同組合では、正面の畑で収穫したブドウをワインにしている。組合長が迎えてくれた。

建物の中は醸造施設とワイン販売店。2階で食事もできる。木の素材を活かしたテーブルと椅子が置かれ、落ち着いた雰囲気がある。

数種類のワインを出してもらった。それぞれ品種や味、香りについて説明を受け、試飲する。そして、組合長が盛り付けた数種類のサラミやハムを食べる。

ワイン醸造協同組合のレストラン



組合員は全員ソムリエの資格を持っており、周辺の農家レストラン関係者を集めてワイン講習会も行っている。お客に良いワインを出し、かつそのワインに合ったレベルの高い料理を提供するよ

う指導しているという。実際、宿泊施設でも周辺のレストランでも満足できる料理が出てきた。

飛び込みで訪ねた農家はブドウを栽培し、自らワインの醸造・販売も行っていた。その方が付加価値が高いからだ。入り口はレンガを積み上げたアーチ形になっている。かつて馬車を使っていたときの名残で、これを壊さずに昔の風情を残しているのだという。

農村全体でオーガニック（有機栽培）に力を入れており、都市部での需要が増えているという。

この農家にも民泊用の部屋が二つあり、オーガニックワインに関心のある人がフランスやイタリアからもやって来る。春から秋までは満室になるという。

中心市街地も周辺部と同じように景観に配慮されており、町の色合いを統一したり建物の外観を調和させたりしている。中心市街地は歩行者優先とし、車の乗り入れも規制している。

日本のように、農村の真ん中に大きな道路があり、そこにチェーン店やコンビニ、派手な看板などが並ぶという光景は一切ない。農村部は高速道路から離れており、ゆったりくつろぐための風景が創り出されている。

グロッタータールに近いフライブルクは、環境都市として知られる。中心市街地であっても、チェーン店などの派手な看板や自動販売機はない。

これらは規制されている。市街地では歩行者が優先され、電車やバスなどの公共交通が利用されている。中心にある教会の前には毎日、近郊の農家

から野菜や果物などが運ばれ、市が立つ。いわゆる「マルシェ」だ。日常の生鮮食品はほぼそろっている。また周りにオープンカフェやレストランがあり、昼食時には満員となる。

フライブルクから農村部に向かう。緑が多く、都市から農村までの景観づくりがしっかり行われていることが分かる。

飛び込みで訪ねた農家



英国とイタリアの農家民泊にも行って見た。両国ともドイツ同様に農村の景観が美しい。

英国で宿泊した農家は、自宅に併設されていた鶏小屋が改装されて宿泊施設になっていた。古い柱や梁はりなどはそのまま活かしてある。部屋は個室タイプで、シャワーとベッドがある。朝食は

キッチンで食べる。

周辺の牧場は生け垣や石垣で囲まれ、羊や牛が放牧されている。街並みも木や漆しつくい喰が多く使われ、地域の色調との調和がとられている。

農家民泊は、英国に1万8000戸、ドイツとフランスには2万戸あるという。欧州の幾つかの国のグリーンツーリズムを体験すると、グリーンツーリズムの取り組みがEU全体の農業政策の下に行われていることが分かる。

グリーンツーリズムの始まり

そもそも、グリーンツーリズムが始まったのはどういう理由からか。それが、最も具体的に書かれているのが「ドイツ グリーン・ツーリズム考」田園ビジネスを創出したダイナミズム」(鈴江恵子著、東京農業大学出版会)である。

それによると、大型化する農業の中で過剰生産が起こった一方で、農薬や畜産による糞ふん尿で地下汚染が生まれたこと、さらに中山間地を含む持続型農業への転換が求められたことなどが背景にある。そこでEUは、多くの予算をつけて補助政策を展開し、農村部の景観づくり、インフラ整備、農家民泊への支援などを徹底して行った。

英国の農村風景が美しいのは、環境を保全するための「環境直接支払い」などの補助金により、生け垣が造られ鳥の営巣場所ができたこと、川が石垣で囲まれ流れの中に生き物が生息する場がつくられたことなどの理由が挙げられる。

こういった支援によって美しい景観が生まれ、

そこにグリーンツーリズムも生まれた。さらに、ドイツやフランスなどではまとまった休暇を取れる制度があり、これが旅行しやすい状況を生み出していることも見逃せない。

日本のグリーンツーリズムはまだこれからと言えよう。市町村は景観づくりに力を入れ、田園という癒やしの場を創出してほしいと思う。

(「地方行政」(時事通信社)より)